



年頭にあたり

医学研究科長・医学部長 西 信 三

新年明けましておめでとうございます。

年頭にあたり、昨年の1年間の出来事を振り返ると共に、本年の抱負として、本年中に実施がほぼ確定している事柄およびまた現段階では希望に過ぎない事など、を述べさせて頂きたいと思います。

平成14年4月に医学部の学士編入として初めて5名の学生が3年次に入学しました。以前より、毎年10名前後の学士が通常の試験で入学しておりましたが、この編入試験では、学士としての知識・見識ならびに資質を基準に選抜しましたが、期待通りの選考になったと喜んでおります。彼等の存在が他の学生に良い刺激となっている様子もあり、数年後を楽しみにしております。

同じく4月には医学研究科に修士課程が設置され、直ちに学生募集・入学試験を行い、定員通り20名の修士が入学しております。9月には平成15年4月の入学者の選抜を行い30数名の合格者を発表しております。最近の急速な医学の進歩は医学以外の工学、理学、薬学など他分野との集学的な研究の成果によるところが大であります。従って、医学研究科修士課程は医学部出身以外の方々に医科学研究の戦列に加わっていただくのが目的です。

様々なバックグラウンドの方々を迎えての教育・研究のカリキュラムの整備に努めていますが、大学院生の方々には忌憚のない要望ないし意見を寄せて頂ければと願うと共に多くの方々が博士課程に進まれることを期待しております。

昨年末に平成15年度政府予算案の内示がありましたが、その中に医学部保健学科の設置が含まれておりますがこれは本年3月の国会での予算成立で確定するものです。その内容としては、3年制である医療技術短期大学部を廃止・転換し医学部に4年制の保健学科を設置するというものであります。設置は平成15年10月を予定しております。短大としての学生募集は平成15年度限りとし、平成16年4月より北海道大学の学生として180人を受け入れることにしています。平成18年には3年次編入20名を加え、3、4年生は1学年200名（看護学専攻80名、放射線技術学専攻40名、検査技術学専攻40名、理学療法学専攻20名、作業療法学専攻20名）となります。教官は教授40名、助教授21名、助手25名で総数86名（現在の短

大の専門教育担当教官は教授18名、助教授18名、助手17名で総数53名です。一般教育担当の教授5名、助教授4名は文学研究科などの6部局に移籍となります）と大幅に増員されますが、その発令は平成15、16、17、18年度に分けて行われます。保健学科の設置完了後は修士次いで博士課程を設置する計画であり、平成17年にはその申請を予定しており、その準備を開始しなければなりません。また、それを受け入れる施設の整備計画の検討は既に開始しております。

医学部の大学院重点化は平成12年に完了していますがこの度、講座名や分野名の見直しを行うと共に一部の講座の分野を再編しました。これらは4月1日より施行されることとなりますが以下の表の通りです。

講座名（旧）	講座名（新）
生体機能構造学	機能形態学
分子病態制御学	病態内科学
機能回復医学	機能再生医学
癌制御医学	癌診断治療学

分野名（旧）	分野名（新）
生体機能形態学	組織細胞学
生体構造解剖学	解剖発生学
時間生物学	時間生理学
機能薬理学	神経薬理学
感染制御学	感染症制御学
呼吸器病態内科学	呼吸器内科学
免疫病態内科学	免疫・代謝内科学
消化器病態内科学	消化器内科学
小児発達医学	小児科学
周産期医学	産科・生殖医学
皮膚粘膜病学	皮膚科学
機能分子学	高次脳機能学
運動器再建医学	整形外科学
生体医工学	スポーツ・再建医学
遺伝子制御医学	血液内科学
協力講座	
特殊感染症学	感染病態学
分子免疫学	免疫制御学
免疫病態学	分子免疫学
腫瘍病理学	癌生物学
腫瘍ウイルス学	癌ウイルス学
腫瘍生化学	分子間情報学
腫瘍制御学	癌関連遺伝子学
腫瘍遺伝子制御学	癌遺伝子制御学
機能素子学	細胞機能学

科学技術立国を目指す我国の科学技術基本計画の第2期計画が平成13年3月30日に閣議決定されていますが、そのなかに国立大学等施設緊急整備5カ年計画が含まれています。「大学院狭溢化の解消、卓越した教育研究の実績がある研究拠点の整備、既存施設の活性化などの観

点から、5年間に緊急に整備すべき施設を盛り込んだ施設整備計画を策定し、計画的に実地する。」としています。計画期間は平成13年度から5カ年です。医学研究科・医学部の研究棟は老朽化・狭溢化が進んでおり、その解消は緊急かつ重大な課題としてありましたが、数年来検討してきた研究棟の新築がこの計画の「大学院充実等に伴う大学院施設の狭溢解消」として取り上げられ、平成14年10月着工、平成16年6月の完成を目指し工事が



医歯学総合研究棟（仮称）

進んでおります。この医歯学総合研究棟（仮称）は主として医学研究科と歯学研究科が使用しますが、オープンラボとしての申請により流動的に使用可能な研

施設の種類	実習・実験室	面積(m ²)
大学院・学部施設	解剖実習室	850
大学院・学部施設	生理薬理実習室	358
大学院・学部施設	生化細菌実習室	358
大学院・学部施設	組織実習室	358
大学院・学部施設	剖検室	243
大学院・学部施設	理工学実習室	179
大学院施設	超微細構造解析室	497
大学院施設	組織培養実験室	358
大学院施設	遺伝子蛋白解析室	358
大学院施設	大型機器室	374
大学院施設	動物実験室	1,220
オープンラボ	特殊生物実験室	358
オープンラボ	人間環境実験室	358
オープンラボ	脳科学実験室	358
オープンラボ	発生分化実験室	358
オープンラボ	バイオマテリアル実験室	179
オープンラボ	情報ネットワーク室	179

究室があるのが特徴と言えます。総面積は12,000平方米で9階建てであり隣接する南研究棟の2倍の大きさを有する最新装備の研究棟となることでしょう。

同計画では昭和45年以前の建築物が大型改修の対象となり得ます。医学研究科の北研究棟、中研究棟、南研究棟、東（南）研究棟、東（北）研究棟、講義・管理棟、図書館の7棟がそれに該当します。大型改修とは老朽化した建物を従前の様に解体・新築するのではなく、新築の6割の費用を投じて改修するとの文部科学省の方針です。国家財政が厳しさを増す中、学内のみならず全国的にも改修の要望が多いと聞きます。平成15年度に南研究棟が改修され、次年度以降も引き続き改修計画が進展することを望んでおり関係各方面の御理解が得られる様に努力しているところです。

また、遺伝子病制御研究所と共同で「卓越した研究拠点の整備」として新研究棟の建設を平成16年度概算で要求する予定です。

21世紀 COE プログラムは平成14年度から開始された研究助成制度であり、応募し、採択されると研究チームに毎年1～3億円の研究費が5年間配分されるものであります。

平成15年度の同プログラムの募集の対象研究分野に「医学」があり、医学研究科では2チームが応募すべく鋭意準備中であります。

本年も上記のように色々な課題がありますが、研究科教官・事務官各位とその実現に力を合わせて努力し、良い結果が得られることを願っております。

年頭の挨拶

教務主任 長嶋 和郎

に合格しているし、臨床各科はぜひ自科に入局してほしいと学生さんを勧誘するし、入局後の臨床研修でも皆さん立派に育っている、というのが何よりの証拠である。それでも「臨床研修をさらに充実させる」、という新しいカリキュラムを組んで平成15年度入学者に示さなければならぬのは「なぜか」と考えたくなる。

忘年会で脳外科の先生から「ハーバードの医師達」とかいう本を薦められて読んでみたが、ものすごい。もちろん一言では言えないが、「医師達は豊富な知識と高度の技術を持ち、優れた論文を発表しながら実践で応用可能な柔軟な頭脳を展開させ、さらに忍耐強くて寛大で懇の深い人格者であり教育者であり、常に献身的に働くことをお互いに競っている集団」のように思えた。皆、知的作業の極地とも言える医の聖人を目指している、とも感ぜられた。著者がそのような感激を日本の医師達に伝えるために書かれたという指摘もあるが、内容は事実であり、兎に角立派であり、大変勉強になるし、この



「セミナー後の教室にて」

後列：長嶋和郎教授。前列：左から野口昌幸教授（遺制研・細胞病態）、田矢洋一部長（国立ガンセンター研究所）、本間さと助教授（医学部時間生物学）、瀧本将人助教授（遺制研・がん遺伝子制御）。

医学部の学生さんたちは皆さんまじめで優秀なのでこれ以上教育に力を入れる必要は無いのではないか、と日々思っている。毎年90%以上の学生があの難しい試験

分野で世界の先端を行こうという気概が感ぜられ、かつ常に次の改革を目指している事にも敬服する。日本に導入するには多くの人々の意識改革と、日本ヴァージョンの作成が必要であろう。

基礎研究でも投稿雑誌に順位が付けられ、少しでも高い雑誌に掲載されるように、付加価値をつける努力をするための討論を頻繁に行うようになって来ている。今までももちろん研究による競争があったが、最近はそれを点数化して、高い得点の人に研究費を出そう、という流れである。最近の日本における基礎医学では欧米研究室との差が少なくなってきて、留学というと「どこへ？何

しに？」という世代になってきているのも間違いではない。返事の多くは「日本ではポストが無いから」ということであるが、はたして経済力の差だけであろうか。臨床医が立派な基礎研究を行うことができるようになってきており、あと少しのお金と余裕があれば、と思うとそんなに「臨床研修を充実させなくても」と研究面での遅れを心配する。

結局、自分の抱いた目標に向かって常に追い続け、一步でも近づくための努力を払い続けることが医学の向上であり、そしてそれが何よりも好きだ、ということが最も大切なことなのである。

教授就任のご挨拶

生殖・発達医学講座（婦人科学分野 教授） 櫻木範明



新任のご挨拶を述べさせていただきます。このたび病態制御学専攻生殖・発達医学講座婦人科学分野を担当させていただくことになりました櫻木範明と申します。藤本征一郎教授の後任として平成14年8月16日に辞令をうけました。私は富良野出身の道産子で、富良野西中学校、札幌南高等学校を経て昭和45年に北海道大学入学、昭和51年に医学部医学科を卒業しました。直ちに葛西洋一教授が主宰しておられた第一外科学教室の門をたたきました。およそ一年間、主に麻酔科での臨床研修を受けましたが、一身上の都合により昭和52年に葛西先生のお許しを得て一戸喜兵衛教授が着任された産婦人科学教室に移らせていただきました。後に葛西先生を継いで教授になられる内野純一先生が当時第一外科医局長をしておられましたがご迷惑をお掛けしましたことを心苦しく思っております。

その時代には、産婦人科というと、いわれのない中傷的な見方をされることもあったのですが、あえて産婦人科の道を選びました。私の父は産婦人科医として富良野で開業しておりました。昼夜を問わず休日もないという産婦人科医の生活を目近に見て、私は産婦人科医はもちろんのこと医者になることをもたらっていました。結局は長男であることを意識するようになり医学部に入ることになったのですが、それでもまだ産婦人科というものに対する一部の心ない見方に対する反発という自縛自縛から離脱できておらず一般外科というものにあこがれてその道を目指したわけです。しかし医師となり医師同士としての父親との会話の中から、産婦人科医は女性の全身の健康管理をしなければならない、すなわち産婦人科の領域というのは大変広範囲である、今風でいえば女性のためのプライマリケアは産婦人科医が担当しなけ

ればならない、ということに思いあたり、考えを改めました。

産婦人科に入局して間もない頃に、一戸教授から北大産婦人科の伝統として受け継がれてきたものは子宮頸癌治療における卵巣温存法の確立と絨毛性疾患の研究であるということを聞かせて頂きました。昭和54年に大学院に入學し、現秋田大学教授田中俊誠先生の指導のもとでエストロゲンとプログesteroneのラジオイムノアッセイによる排卵誘発モニタリングと過排卵および卵巣過剰刺激症候群の予防の研究に携わさせていただきました。学位論文の内容は胎盤ホルモンのラジオイムノアッセイによる絨毛性疾患の鑑別法についてでした。昭和62年に一戸教授退官の後を受けて藤本征一郎教授が昇任され、私は婦人科腫瘍担当を命ぜられ婦人科病理グループの責任者として悪性腫瘍手術と婦人科腫瘍研究に従事させていただきました。当時は婦人科悪性腫瘍における傍大動脈リンパ節転移の実態も予後因子としての意義も十分に明らかになっていた時期であり、藤本教授のもとで、積極的に手術治療を行うという教室の方針が立てられました。教室ではこの分野の臨床研究を行い、いくつかの国際誌に論文発表を行ってまいりました。藤本教授のこの仕事は国内外を見ても先駆的なものであったと思います。さらに、我が国で増加傾向にある子宮体癌に关心を持ちまして、子宮体癌の手術病理標本をすべて詳細に検討しましてCox比例ハザードモデルを用いて病理組織学的予後因子の解析を行いました。その後子宮体癌の国際進行期分類が術前所見により決定される臨床的進行期から術後の病理組織学的所見に基づいて決定される手術進行期に変更されたのですが、そこで取り上げられている因子とその重み付けがわれわれの論文と一致しており、自分たちの方向性が正しかったことを確信いたしました。私は今後藤本教授時代のこれらの貴重なデータを踏まえて手術治療個別化の指針づくりを計りたい

と考えています。また藤本教授時代にはそれまで歴代の産婦人科教授が築き上げてきた海外研究者との大変実り多い協力関係が大きく発展いたしました。国際的視野を持つた多くの産婦人科医が育ったと思っており、今後もこの関係は大切にしてゆきたいと考えております。

女性のリプロダクションに関わる細胞、すなわち子宮内膜腺細胞、卵巣顆粒膜細胞、胎盤絨毛細胞などは一定周期を持ってきわめて活発な増殖と分化の道を辿るユニークな特徴を持っております。この増殖と分化の調節メカニズムを探ることは癌の研究に役立つであろうと考えられ、1991年から2年間の米国ペンシルバニア大学留学中に胎盤絨毛におけるBcl-2発現と絨毛細胞の増殖・分化についての研究に従事しました。帰国後はBcl-2研究を子宮体癌に応用し、アポトーシス機序の破綻と子宮体癌発生についての研究を行って参りました。さらに遺伝子病制御研究所守内哲也教授と大学院地球環境科学科井

上勝一助教授らとの共同研究で子宮体癌におけるp53ドミナントネガティブ変異とBax変異についての検討を行い、p53ドミナントネガティブ変異が予後不良体癌と関連していることを見いだしました。これを踏まえ、今後の研究の方向性の一つとしてp53ドミナントネガティブ変異の立体構造を変化させ転写制御活性を正常化する低分子化合物の臨床応用に注目しております。

21世紀は「女性医学の時代」がキーワードの一つであります。他分野・他領域の研究者・臨床医、海外の研究者と協力し、QOL重視、機能温存重視の立場で総合的な女性医学の時代へのパラダイムシフトにいささかでも寄与したいものと考えております。ここにお名前を挙げました先生方の他にもあまたの方々からお教えを頂き、ご協力を頂いてまいりました。衷心より御礼を申し述べますとともに今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

修士課程制度の内容と現在の実施状況

情報薬理学講座（機能薬理学分野 教授）吉岡 充 弘



平成14年度から医学研究科に41名の修士課程担当分野および主任教授による「医科学専攻（修士課程）」が設置され、初年度は定員の20名の新入生を迎えることができました。教育体制においては医学研究科のみならず遺伝子病制御研究所、電子科学研究所の教授陣にも参画していただいている。

本専攻では医学的な視野や研究方法を必要とする種々の社会・産業分野において活躍する、専門的学識と国際的視野を備えた人材を育成することを教育目標としています。この10月から配属分野も決定し、「専門科目」の講義・演習・実習がスタートしています。履修内容は「一般科目」を19単位以上、「専門科目」を11単位修得して、修士論文審査に合格することにより「修士（医科学）」の学位が授与されることになります。「専門科目」とは配属分野で展開される「医科学演習Ⅰ（主科目）」と「医科学実習」、さらに他の分野で開講される「医科学演習Ⅱ（副科目）」から構成されています。

入学時から履修する「一般科目」については、15科目が提供されていますが、予想を超える様々な不都合が表面化してきました。その背景には各学生の出身学部等が多岐に渡っていること、すなわち生物学を基盤とした学問を体系的に履修していない学生への配慮が欠けていたためと思われます。そこで、そのような学生に対して、

リメディアル（補習）科目「基礎・統合医科学（R）」を新たに開講し、主に生物学を中心とした各方面の先生方のご協力により対処いたしました。しかし、これで充分といえるものでなかったことは教官・学生の双方が認めるところであります。また、開講時期が通年に渡ったため、分野配属後も虫食い的に「一般科目」を履修しなければならず、論文作成に少なからず支障が生じていることも事実です。

このような現状を踏まえ、本間研一教授を委員長とする大学院カリキュラム検討専門委員会では平成15年度医科学専攻における「一般科目」の授業方法について検討がなされ、12月12日開催の研究科教授会においてその新たな授業方法が確認されました。10月の配属分野決定後は、「専門科目（論文作成指導を含む）」の履修に専念できるよう配慮し、「一般科目」は原則として1年次前期に開講するという趣旨に基づいたものとなりました。現在、上記委員会で修士論文の提出および審査基準についても案が検討され、研究科教務委員会を経て、研究科教授会において審議される運びとなっています。

平成15年度は30名を越える新入生を迎えることになります。最近の医学・医療は細分化、先端化され、これらを支える医学分野の教育は学際的に融合されなければ今後の発展は難しいとまで言われています。今後、各出身学部等で習得した多様な知識や技術を活かした独創的な発想ができる医科学研究者・教育者が巣立っていくことを切に願うものです。

お知らせ

◆ 平成15年度科学研究費補助金の申請状況 ◆

平成15年度の科学研究費補助金の申請件数は、全体で189件でした。内訳は下表のとおりとなっております。

研究種目	審査区分	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	備考
特別推進研究		2	2	1	1	1	
特定領域研究					43	33	特定(A、C)を統合
特定領域研究(A)		44	48	22			13年度で廃止
特定領域研究(C)			16	38			13年度で廃止
地域連携推進研究費		2	2				13年度から募集中止
基盤研究(S)				14	2	3	13年度発足
基盤研究(A)	一般	7	6	9	13	9	
	展開	4	5	6			13年度で廃止
	海外学術		0	0	0	0	12年度発足
基盤研究(B)	一般	40	44	36	49	39	
	展開	48	44	38			13年度で廃止
	海外学術		1	2	4	1	12年度発足
基盤研究(C)	一般	36	40	40	38	33	
	企画調査	5	4	1	3	1	
萌芽研究					58	63	14年度から新たな種目
萌芽的研究		43	52	50			13年度で廃止
若手研究(B)					11	6	14年度から新たな種目
奨励研究(A)		22	20	13			13年度で廃止
合計		253	284	270	222	189	

※ 申請件数は新規の数字である。

※ 教官1人あたりの申請件数は、1.22件(前年度1.41件)である。

◆ 消防訓練について ◆

医学研究科では、10月25日(金)午後2時25分北研究棟2階実験室から出火したとの想定で、教職員・学生等約200名が参加して、消防訓練を実施しました。今回の訓練では、本研究科と遺伝子病制御研究所との合同で自

衛消防班を中心とした通報、避難誘導、初期消火の訓練が適切かつ迅速に行われました。また、訓練終了後は、実際に消火器を使用した消火訓練を行い、訓練の重要性と防火に対する意識を高めることができました。

◆ 教務関係の主な行事予定 ◆

◇大学院

大学院入試関係

- 博士課程入学試験：
(合わせて学位申請に係る語学試験を実施)
2月5日(水)：外国語試験、専門科目試験
2月6日(木)：留学生に対する日本語試験

- 研究生入学願書受付期間(平成15年4月入学)：
2月3日(月)～10日(月)

博士課程修了関係

- 学位論文審査等日程：
1月下旬に公開発表、各審査委員による論文審査開始
2月13日(木)の教授会で学位論文最終審査
3月25日(火)学位記(博士)授与式11時30分挙式

◇医学部

学部授業関係

- 定期試験：
2年：2月3日(月)～7日(金)
3年：2月17日(月)～21日(金)
5年：4月14日(月)～25日(金)
- 3年基礎特別演習(基礎配属)：
2月3日(月)～14日(金)

- 学位記授与式(卒業式)：
学位記授与式：3月25日(火)10時挙式
(9時15分集合)

医学部学位記伝達式：13時から
卒業祝賀会：学位記伝達式終了後
卒業者の発表は2月14日(金)の予定

- 平成15年度授業開始日：
6年：4月7日(月)
3年、4年、5年：4月1日(火)
3年学士編入学者：4月1日(火)
2年：4月9日(水)
1年：4月10日(木)

- 退官記念最終講義：3月4日(火)13:30から
講演者：田代邦雄教授、小柳知彦教授、劍物修教授、
井上芳郎教授

- 医師国家試験日程：3月15日(土)～17日(月)

大学入試関係

- 大学入試センター試験：1月18日(土)～19日(日)
- 私費外国人留学生入学試験：2月20日(木)
- 本学第2次試験(前期日程)：2月25日(火)
- 帰国子女特別選抜面接試験：2月26日(水)
- 本学第2次試験(後期日程)：3月12日(水)

◆ 受賞 ◆

文部科学大臣表彰

中央研究部 文部科学技官 小川 良彦 氏

文部科学技官小川良彦氏は医学に関する教育・研究等に係る補助的業務に関する顕著な功労が認められ、平成14年11月26日に文部科学大臣から医学教育等関係業務功労者として表彰されました。

◆ 構内交規制について ◆

現段階として医系ブロック(医学部、医学部附属病院、遺伝子病制御研究所)の車両及び商用車等は、北15条門から入出構(ゲートによりパスカードで規制する)する計画は、実施の予定であります。それ以外の車両(郵便車・タンクローリー・酸素運搬車・身体障害者が乗っているタクシー等の特殊車両)については、13条門から入構して中央道路を通行することになります。しかし、

実施の段階において変更の場合もあり得ます。

なお、実施時期は、当初平成14年末との計画案がありました。現在のところ平成15年3月末か4月頃の実施予定であり最終計画案について施設・環境委員会構内交通専門委員会では、現在も問題点等を検討中であり実施計画は流動的です。

◆ 平成15年学会案内 ◆

1. 学会等名：第30回日本集中治療医学会総会
2. 担当分野名：侵襲制御医学分野
3. 開催予定年月日：平成15年2月4日（火）～6日（木）
4. 会場：ロイトン札幌、北海道厚生年金会館
5. トピックや目的：本会は集中治療医学の普及と進歩のため、学問の研鑽と情報交換を目的とし、本邦における集中治療医学を集約する学術集会です。本会には日本全国から約2,500名の医師、看護師、臨床工学技士が参加し、集中治療医学の最先端の診断、治療、基礎研究などの発表と討論が行われます。また、国内外をリードする研究者を招待し招請講演、教育講演も予定しております。学会はさらに医療機器展示、会員間交流などの情報交換のみならず、教養講座などの場も提供しております。

1. 学会等名：第1回時間生物学世界大会（1st World Congress of Chronobiology）
2. 担当分野名：時間生物学分野（4月より 時間生理学分野に変更）
3. 開催予定年月日：平成15年9月9日（火）～12日（金）
4. 会場：北海道大学学術交流会館、北海道大学百年記念会館、北海道大学クラーク会館
5. トピックや目的：本大会は、世界の国や地域の13学会が所属する世界時間生物学会連合の、第一回会議です。時間生物学は、地球上に生息するすべての生物がもつリズム現象である生物リズムと、その中枢である生物時計を研究する学問です。本大会では、バクテリアからヒトまで、また、時計遺伝子から時間治療まで、広範な研究の最新成果が発表されます。循環器、呼吸器、免疫疾患など様々な疾病発症危険時間帯の検討、治療効果時間の抽出、時計遺伝子とその変異、睡眠障害とその治療などがトピックスとなります。
詳細は学会ホームページ <http://www.e-convention.org/wcc2003/> をご参照下さい。

1. 学会等名：心筋症国際シンポジウム Frontiers in Cardiomyopathy
2. 担当分野名：循環病態内科学分野
3. 開催予定年月日：平成15年10月17日（金）～18日（土）
4. 開催場所：札幌コンベンションセンター 札幌市白石区東札幌6条1丁目
5. トピックや目的：心筋症で認められる心肥大・拡大から心不全へと至る過程を phenotype と genotype の相互関係を含め病態・診断面での問題点を明らかにし、今後の診断基準の見直しの参考とすることを目的とする。

◆ 平成14年学会報告 ◆

1. 学会名：第43回日本神経学会総会
2. 担当分野：神経内科学分野
3. 開催年月日：平成14年5月29日（水）～31日（金）
4. 開催場所：ロイトン札幌、北海道厚生年金会館
5. トピックス・目的など：第43回日本神経学会総会は田代邦雄教授を会長に「北の大地からのメッセージ～過去と未来の調和を求めて～」をテーマに開催された。本学会総会の北海道での開催は第7回諒訪望会長、第25回都留美都雄会長に続き丁度18年毎、3回目となる。北海道に神経学の芽を育まれた都留美都雄先生を称える「都留メモリアルレクチャー」に始まり最先端の研究まで、教育講演9、シンポジウム9、ランチョンセミナー9、イブニングセミナー3、サテライトシンポジウム3、さらに一般演題は史上最多の1,200題、参加者は3,500名を越え盛会のうちに終了した。新設された日本神経学会賞と権林賞の第1回受賞者の表彰、主要神経疾患（6疾患）の日本神経学会治療ガイドラインの公表、さらに今世紀初のサッカー・ワールドカップ札幌初戦直前など話題にとむ学会となった。

1. 学会名：第66回日本循環器学会
2. 担当分野：循環病態内科学分野
3. 開催年月日：平成14年4月24日（水）～26日（金）
4. 開催場所：札幌厚生年金会館 ホテルロイトン他
5. トピックス・目的など：循環器関連の全ての分野をカバーし9,500名以上の参加があった。

1. 学会名：第36回日本側弯症学会
2. 担当分野：運動器再建医学分野
3. 開催年月日：平成14年11月14日（木）～15日（金）
4. 開催場所：ホテルロイトン札幌
5. トピックス・目的など：脊柱矢状面の弯曲異常

1. 学会名：第6回脊柱再建国際セミナー
2. 担当分野：運動器再建医学分野
3. 開催年月日：平成14年7月21日（日）～23日（火）
4. 開催場所：北海道大学大学院医学研究科第5講堂
5. トピックス・目的など：各種頸椎、胸腰椎病変における脊柱再建の実際

1. 学会名：第16回東日本手の外科研究会
2. 担当分野：運動器再建医学分野
3. 開催年月日：平成14年2月1日（金）
4. 開催場所：北海道大学学術交流会館
5. トピックス・目的など：RA wrist の手術治療、手の外科における軟骨損傷、診断・治療の新しい試み

1. 学会名：第29回日本肩関節学会
2. 担当分野：運動器再建医学分野
3. 開催年月日：平成14年9月20日（金）～21日（土）
4. 開催場所：札幌プリンスホテル、国際館パミール
5. トピックス・目的など：スポーツ障害肩の治療

編集後記

広報第18号をお届けします。平成15年初めの広報ということで、年頭にあたってのご挨拶を研究科長と教務委員長からいただきました。また、昨年より開始された修士課程の現状についても吉岡先生から紹介していただきました。いずれも、選ばれた言葉で適切にお考えを述べていただいています。口頭で直接聞くのとは異なりますが、この広報を読まれる多くの方が知っている方からいわば直接語りかけられたものです。現在、医学研究科においてもさまざまな計画が進行中で、あまり具体的には記述出来ないこともあります。しかし、それぞれの文章の意味するところを理解いただければと思います。それが広報の一つの役目とも考えています。

(有川 二郎)

——Home Page のご案内——

医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発 行 北海道大学医学研究科広報編集委員会
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
連絡先 医学部庶務掛 電話 011-706-5003
編集委員 有川 二郎、岩崎 喜信、田中 淳司、
小橋 元、佐藤 松治